

### 行政視察報告

## 観光と環境—両立を模索する尾瀬片品村

群馬県片品村尾瀬ヶ原 7月25日~26日



尾瀬湿原 木道にて

#### 立山町自然保護特別委員会

日光国立公園「尾瀬」は、福島・群馬・新潟の3県にまたがる湿原で、高山植物の宝庫「至仏山」、「ひうちが岳」など、2,000m級の山々に囲まれた尾瀬ヶ原と、神秘的な湖、尾瀬沼の2つの顔をもっている。  
群馬県片品村(標高800m)は、年間観光客が227万人、観光と農業が主な産業で、合併は明治以来行っていないという。  
尾瀬では、昭和47年7月に

ゴミ持ち帰り運動が始まり、そして49年5月にマイカー規制が実施された。山小屋は16軒あり、収容数は2、200人、小屋には合併浄化槽が設置され、石鹸・シャンプー使用禁止、公衆トイレはチップ制を導入、山小屋から出るゴミは、小屋の責任で人によって運び出される。私たちは、80kgの荷を背負う「ポッカ」と何度か出会った。  
それでもゴミの違法焼却や山小屋の建て替えに伴う廃材不法投棄事件など、自然保護意識への問題はまだ残る。  
また、狩猟者がいない尾瀬では、クマが残飯目当てに10日間も居座ったという。これも頭の痛い話だ。  
尾瀬の入山数は、平成8年に64万7千人になり、オーバーユース(過剰利用)が問題となった。  
尾瀬保護財団が、平成10年に入山者「1日1万人以下」の暫定基準を設定。昨年は、31万8千人とピーク時に比べ半減。基準を超えたのは1日で、千明村長は「オーバーユースは過去のもの。観光が主産業の村としては誘客が喫緊の課題」と話される。  
立山を預かる我が町も、観

光と環境を両立させる意味においては共通点が多い。標高1,400mにある長さ6km幅2kmの湿原尾瀬と3,000m級の山々が連なる立山とは山歩きという観点では違いがあるが、高山植物の宝庫であること、弥陀ヶ原の池塘(ガキの田んぼ)と同じように、みずみずしい緑の広がりなどは同じ環境だ。  
尾瀬の土地7割を所有する東京電力は、尾瀬ヶ原の木道を20kmを管理し、毎年取り替えや修繕を行っているという。「美しい国」このかけがえない自然が残る尾瀬で、中高年や小学生の団体など、たくさんの人々に出会った。すてきな「夏の思い出」を心に刻み込んでいけよと独り言。  
最後は、この一小節で。「夏が来れば思い出す 遙かな尾瀬 遠い空」

#### 〈参加者〉

- |      |      |
|------|------|
| 委員長  | 村田 昭 |
| 副委員長 | 細川 均 |
| 委員   | 坂井立朗 |
| 〃    | 窪田一誠 |
| 〃    | 米田俊信 |
| 〃    | 中川光久 |
| 〃    | 高嶋清光 |

## 町民に親しまれる議会だよりを

8月29日~30日

東京都千代田区シエーンパツ八砂防会館

#### 議会広報特別委員会

8月29日・30日に行われた広報研修会に6名が参加した。広報紙作成の技術向上を目的に、研修参加者は全国120町村から集まった。  
初日は、3部構成の講義で、第1部は「わかりやすい文章表現・表記について」というタイトルで、「自分の言いたいことを読み手にわかりやすく伝えるには、単に自分の言いたいことを言うだけでなく、読み手がその文章を読みながら、どのように思うか、どのように感じているかを推測しながら書く態度が必要である」という内容だった。

第2部は、「美しい自然風景の撮り方」というタイトルで、思わず手にとる美しい表紙を作ることが多くの人に読んでもらうことが出来る。発行時期に合わせた写真を載せることで季節感をだすことが大切であるということ、広報紙における写真の重要性を学んだ。  
第3部は、「企画・編集のテクニック」というタイトルで、企画の立て方として、編集企画は特集企画、定番企画、チャレンジ企画の3つに分けることができる。誰に何を伝えるべきか、読者は誰なのかと言うことを常に考えること、また、読者は飽きる天才であるの

# 立山で生まれた日本の砂防

## 立山砂防100周年

### 常願寺川への誘い

#### 「恵みの水・常願寺川」

常願寺川が運ぶ豊かできないな水は、現在、農業用水や工業用水、富山市民の飲料水として、地域の経済活動や日常生活に欠かせません。まさに「水の王国」富山県にふさわしい川といえる。

しかし、かつての常願寺川は、その名が「川の氾濫がないことを常に願う」という人々の祈りを表していると言われるように、大変な暴れ川であった。

### 洪水との闘い

#### 「佐々堤」と「殿様林」

戦国時代に富山を治めた佐々成正は、洪水をくい止めようと堤防を築いたほか、防水林として松を植えた。今でも常願寺川左岸には「佐々堤」の跡が残り、松林のあった辺りは「殿様林」という地名で呼ばれている。

#### 「安政の大災害」

安政5年(明治維新の10年前)、M7(推定)の大地震が飛越地方を襲った。この地震で大鳶山・小鳶山は大崩壊をおこし、常願寺川水源部の立山カルデラに膨大な量の土砂が



本宮えん堤

堆積した。やがてこの土砂は土石流となって常願寺川の下流に押し寄せて水害をおこした。その上、川底にたくさん土砂が貯まった常願寺川は、大雨のたびに水害を起こす暴れ川に姿を変えてしまった。

#### 「改修工事の始まり」

明治の中ごろ大洪水が発生した。当時の森山知事は治水工事の技師としてオランダ人デ・レイケを富山に招いた。デ・レイケは、合口用水を作って灌漑用水の取水口を一カ所にまとめ、また、白岩川と合流していた下流の流れをまっすぐに海に向かうようにするなどの改修工事を行ったので、水害は少なくなった。

### 護天涯への挑戦

#### 「砂防工事のはじめ」

下流大改修工事により水害は少なくなったものの、上流から流れてくる土砂のため川底は上昇を続け、毎年のように氾濫は繰り返された。

富山県営砂防工事は明治39年に始まった。その頃の県知事浜田恒

之助は「護天涯」と揮毫して、工事への意気込みを示した。これは流域住民を守るためには天涯(天のはて)立山カルデラを護ることが大切という意味で、立山砂防の重要性を表している。

#### 「砂防工事の主体は 富山県から国へ」

苦勞に苦勞を重ねた工事は挑戦と挫折の連続だった。そこで、政府は富山県だけによる砂防は困難と判断、大正15年、国による直轄砂防を決定した。

### 安心・安全へ

#### 「安心を勝ち取るまじに」

立山砂防の代表的な2つの砂防えん堤が昭和12年と14年に相次いで完成した。一つが中流部の重要施設である本宮砂防えん堤、もう一つが立山砂防の基幹えん堤に位置づけられる白岩砂防えん堤である。

#### 「安心・安全な環境作りへ」

現在も危険が完全に去ったわけではない。近年は構造物をつくるだけでなく、ライブカメラの設置や光ケーブルの敷設など情報伝達網の整備、また、各行政機関や地域住民が参加する防災訓練も実施している。

砂防事業には将来に備えた準備が必要なのである。



砂防会館「シエーンパツ八」にて